

研究あら・かると

ベトナム・ラオス旅行記ーフォーを食べながら考えたこと

大 嶋 英 一

はじめに

2017年8月、初めてベトナムとラオスを5泊6日の日程で旅行した。「日本はアジアの国だ」などと普段学生に話しているものの、自分自身どのくらいアジア各国の歴史や文化等を理解しているかというとはなはだ心許ない。中国、香港、韓国そしてフィリピンについてはかつて在勤していたことがあるので多少とも知識はあるが、今回旅行したベトナムやラオスについては皆目見当がつかない。ということで今回の旅行が決まってから慌ててベトナムに関する本を3冊買った。「歴史的視点を持つことが大切だ！」これまた、私が学生にいつも強調していることなので、まず古田元夫著『ベトナムの世界史』という本を古本屋で安く手に入れて読んだ¹⁾。この本は大変参考になったが、20年以上前に出版されたので最近の状況がよく分からない。そこで、最近のベトナム事情に関する残りの2冊は飛行機の中で読むことにした。ところが「好事魔多し」、飛行機の中は誘惑が一杯。食事は出るし、映画も無料で見放題となるとなかなか本を読む気にはなれない。羽田ーハノイ間は5時間半ほどかかるので、とりあえず映画を1本見てから本を読むことにした。見た映画は『フォレスト・ガンブ』。軽い知的障害のある主人公＝フォレスト・ガンブの純情物語でアカデミー賞を受賞した秀作だ。驚いたのは、主人公がベトナム戦争に従軍したことで、これが物語の大きな部分を占めていたことだ。これからベトナムに行く身としては不思議な巡り合わせを感じた。結局、本は読めなかった。

今回の旅程は、1日目に羽田からハノイに入り、2日目はハノイで日本大使館訪問及びベトナム外交学院との意見交換等、その後ベトナム中部のフエに移動、3日目は朝から車で東西回廊に沿ってベトナムからラオスを横断してタイ国境に近いサバンナケット泊、4日目はサバンナケットの市場を覗いた後東西回廊を逆行してベトナム中部のハティン泊、5日目はハティンのフォルモサ製鉄所と付近の漁村を視察後フエに移動、6日目はフエからハノイを経て帰国というかなりの強行軍であった。

1. 歴史博物館で考えたことーベトナムと中国

ハノイでの主な日程は、日本大使館訪問とベトナム外交学院との意見交換であった。大使

館では梅田大使に最近のベトナム事情と日本との関係を懇切丁寧に説明していただいた。飛行機の中で現代ベトナム事情に関する読書をさぼった私には大変有り難かった。

日程の合間を縫って歴史博物館を尋ねた。インド文化的なものと中国文化的なものが並んで展示されており、ベトナムを含む東南アジアが二つの巨大文明の交差点に位置しながら独自の文化を育んできたことが分かる。一つの展示の前で私の足が止まった。“THE CRIME OF THE MING INVADER”（明侵略者の罪状）という展示である。それによると、1407年にベトナムに侵攻した明軍は、9,000人の職人、音楽家、医師、婦女子を連れ去ったという。

ベトナムの歴史は、北方の巨人である中国との闘争の歴史であると言っても過言ではないだろう。実際、漢王朝時代に占領されてから10世紀に自立するまで実に千年にわたってベトナムは中国の支配下にあったのである。元の時代にも侵攻を受けたベトナムは粘り強く抵抗した。日本では元寇は神風が吹いて元が撤退したと言われているが、一説によるとベトナムが元をてこずらせたために元は三度目の日本への侵攻を諦めたとも言われている。視野を広げてみると当時の国際情勢が元寇にも影響を与えたことが分かる。

ベトナムと中国の対立は現代まで続いている。1979年には北部国境付近で中越戦争が起きている。ベトナム戦争当時はベトナムを援助し続けた中国がどうしてベトナムと戦争をすることになったのか？ 中国では、ベトナムは恩知らずだという意見が強い。他方、ベトナム外務省は1979年に『中国白書』²⁾を公表し、ベトナム戦争中も中国はベトナムの頭越しに米国と会談してベトナムに圧力をかけたと手厳しい。南シナ海のサンゴ礁の領有を巡っては、現在も中国とベトナムは鋭く対立している。

このように見てくるとベトナムと中国は不倶戴天の敵のように思われるかもしれないが、現実の両国関係は大分異なる。確かに南シナ海では対立する両国であるが、トンキン湾では両国の境界線を挟んだ石油の共同探査が合意されているし、両国のコーストガードの船舶が相互訪問している。さらに、両国の指導者の訪問も頻繁である。尖閣を巡る対立で最高指導者の正式の会談すらままならない日本とは大違いなのである。なぜこのような差が出るのだろうか？ ベトナムにとり中国は最大の脅威である。だからこそベトナムの指導者は頻繁に中国指導者と会って意思疎通し、不測の事態を招かないようにしているのであろう。北の巨人と“共生”するためにベトナムの外交はなかなかしたたかである。

2. 東西回廊で考えたことー経済発展と少数民族

ハノイからベトナム中部のフエに移動した後、車で東西回廊に沿ってラオスを横断しタイ国境付近にあるサバンナケットまで行った。東西回廊とは、ベトナムからラオス、タイを経てミャンマーに至るインドシナ半島を東西に横切る幹線道路のことである。ASEAN各国を横切る道路を作ることによって物流を円滑化し、経済発展と経済統合を進めることが目的である。

まず、ベトナムとラオスの国境の町ラオバオからラオスに入国した。ベトナムでも感じたことだが、ラオスも途上国としては例外的に道路がよい。東西回廊に国の発展を賭ける意気

込みが伝わってくる。ところが、国境ではベトナム側からラオスに向かう大型のコンテナトレーラーが数台停まっていたが、ラオス側に行くと交通量はガクンと減り、何となくのんびりした雰囲気になる。道路がよいので本来時速 100 km で走れることも可能だが、実際はできない。なぜならば、犬、山羊、牛に鶏までが頻繁に道路を横断するからだ（写真 1）。どう見ても沿線の住民よりも家畜の数の方が多い。「人と自然」が共生している生活の中に道路が通っているのだから車が遠慮するしかない。第一、時速 100 km で牛にでも衝突しようものならこちらの命もない。



写真 1 道を横切る山羊

ベトナムとラオスの国境付近は山岳地帯で少数民族が多く居住している。家は高床式である（写真 2）。走行中何度も大雨にあったが、水はけが悪くあたりは見る見る間に水がたまっていく。高床式の家は洪水を避けるためのものなのかもしれない。ベトナムもラオスも多く



写真 2 少数民族の家

の少数民族が住んでいる。ベトナムには 53、ラオスには 48 の少数民族がいるという。のどかな風景を眺めていて、ある考えがふと浮かんだ。現在世界で起きている紛争の多くは民族紛争だ。ベトナムやラオスでは、多数民族と少数民族の間、あるいは少数民族同士で紛争はあるのだろうか？ ベトナム戦争中、ベトナムでは南北どちらにつくかで民族対立があったと言われている。おそらく現在も民族対立はあるだろうが、少なくとも武力紛争はなさそうである。目の前ののどかな風景を見ていると、民族対立が深刻化するのには経済発展のせいではないだろうかという疑問を持った。経済発展の恩恵を受けるのは大抵多数民族だ。言葉、習慣、文化の違いだけでも対立は生まれる。これに経済的格差が加われば対立は紛争に発展するかもしれない。皆が貧しければ共生が可能だが、民族の違いが貧富の格差に繋がると共生が困難になるのではないかと。仮にこの命題が正しいとしても、皆が貧しいままでいるべきだというわけにはいかない。少数民族を抱える国は経済発展するな、とは言えないからだ。

ベトナムからラオスに行って驚くのは、国境を越えるとベトナム語が全く通じないことだ。ベトナムは建国後、少数民族にも国語教育（ベトナム語教育）を行ったので、少数民族地域でもベトナム語が通じるが、国境を越えた途端、言葉が通じなくなるのである。言葉は文化であるから、少数民族の言葉も尊重しなければならない。しかし、言葉の壁は経済発展にはマイナスだ。ベトナム政府は国語教育を進めると共に少数民族の言語を尊重する方針を打ち出しているが、言葉の違いが少数民族にとって教育上のハンディであることに違いはない。言葉と経済発展は、多民族国家が抱える難しい問題だ。

もう一つ、ベトナムからラオスに行って気づいたのは宗教の違いだ。両国とも仏教国だが、ラオスの寺院はタイの寺院にそっくりである（写真3）。ベトナムは大乗仏教なのに対し、ラオスは小乗仏教なのである。ベトナム、ラオス、カンボジアは昔からインドシナ三国と言われ、何となく同一性の高い国々とのイメージがあったが、実際に行ってみると民族だけでなく、言葉や宗教も異なることが分かった。まさに百聞は一見に如かずで、現地調査の重要



写真3 ラオスの寺院

性をいまさらながらに痛感する旅であった。

さて話はがらりと変わるが、同行の M 氏からラオスの鶏は世界一うまいというので食べにいった。ラオスで見かける鶏は一見して日本にいるのとは異なり痩せて筋肉質で確かにうまそうである。屋台の並んだマーケットで鶏の半身を串に刺して炭火で焼いている食堂に入った。食堂といっても屋根があるだけのオープンな作りでテーブルと椅子が並んでいる。腰掛けて鶏が焼けるのを待っている時、ふと足下を見るとコンクリートの床の上にウジ虫がうごめいている。日本ではウジ虫を見ることは滅多になくなったから、数十年ぶりの出会いだろうか？ しかしなぜコンクリートの床の上にウジ虫がいるのだろうか？ その理由はすぐ分かった。我々がテーブルに着くとどこからともなく猫が2匹テーブルの下にやって来た。猫は我々が食べた鶏のおこぼれにあずかろうとしているのだ（写真4）。他の食堂でも犬がテーブルを回って餌をねだっていたが、こうやって人と共生しているのだろうか。ウジ虫は猫が食べ残したほとんど骨しか残っていないカスを餌にしているわけだ。これも共生だろうか？ 足下を気にしながら食べる焼き鳥は確かにうまく、世界一はともかく入賞は間違いないだろう。



写真4 残飯を食べる猫

3. ハティンの漁村で考えたこと

ラオスからまたベトナムに戻り、ベトナム中部の街ハティンを目指した。ハティンは元々漁村の点在する鄙びたところだったらしいが、現在は異なる。我々一行は夜中にハティンに着いたが、巨大コンビナートの電灯が煌煌と輝いていた。ここにはフォルモサという台湾系の企業により製鉄コンビナートが建設され、試験操業中なのだ。ベトナムは、1980年代にドイモイ政策（刷新政策）を導入して以来、高成長を続けているが、それでも一人当たりのGDPは2,000米ドルほどで第一次産業主体の経済である。工業は衣料等の軽工業が主体

で重化学工業はまだまでである（そういえば、今回の旅行のために日本で買った下着はベトナム製だった）。国造りに欠かせない鉄鋼の多くは輸入に頼らざるを得ないから、ベトナムの国家指導者にとってフォルモサは輸入代替産業の筆頭として最重要のプロジェクトである。ところがこの期待の星フォルモサは大変な環境汚染をひき起こしてしまったのである。

2016年4月ハティンの海岸に突然大量の魚が打ち上げられた。そしてその魚を食べた家畜も死んだという（死人も出たと言われているがそれを明確に示す資料はない）。魚の大量死はその後も続き、範囲がハティン周辺だけでなく中北部ベトナムの海岸一帯に広がり、大きな社会問題となった。ちょうどフォルモサが試験操業を始めた時期であり原因は同製鉄所が海に流した有害な廃液に違いないということで、ベトナムでは珍しい抗議デモがフォルモサに対し3回行われたと報じられている。住民はフォルモサを裁判所に訴えたが却下された。情報が乏しく実際に何が起きたのか、被害はどの程度なのか、原因調査は適正に行われたのか等について明確なことは分からない。結局2016年6月になって、フォルモサが責任を認め5億ドル（500億円あまり）の賠償金を支払って政治的には解決されたことになっているが、適切な情報開示が行われないから住民は魚介類を安心して食べられなくなり、漁民にとっては死活問題となっている。

今回、我々はフォルモサに隣接する漁村を訪れた。砂浜に出てみると竹で編んだボートが干してあり、のどかな雰囲気だが、フォルモサ側の海岸には巨大な堤防が沖に向かって延々と伸びており対照的な光景だ（写真5）。漁民に話を聞くと、賠償金は一銭も漁民の手元には届いていないという。どうやって暮らしているのか聞くと、魚を捕って食べているが子供には食べさせていないとの返事だった。司法的解決も認められず、賠償も支払われないということでは住民の不満が爆発するのは時間の問題だろう³⁾。



写真5 ハティンの海岸

ところで、車で走っていて町並みとは不釣り合いなほど立派なカトリック教会（写真6）がいくつもあることに気がついた。聞けば、この地域は元々カトリック教徒の多い場所だという。社会主義国に立派な教会というのはやや意外だが、ベトナムを含むインドシナはかつ



写真6 カトリック教会

てフランスの植民地であったからその影響であろう。当然のことながら、政権と教会の関係は微妙でありフォルモサの問題が起きる前から緊張状態にあったが、環境汚染問題は両者の関係を一層複雑化させたようだ。戦争でベトナムは南北に分断され、結局北ベトナムが南ベトナムを吸収する形で統一されたが、今でも南の住民の間には複雑な感情が残っているらしい。ハティンは元々北ベトナムに属していたが、先述のようにカトリックの勢力が強かったことで政権とは微妙な関係にある。一つの国でもこのように国民統合の障害となる要素がいくつも重なっており、共生の実現は容易ではない。

フォルモサの環境汚染は、透明性の欠如と法的救済の不備を露呈した。フォルモサには約7,000人の従業員がおり、日本人も50人程が働いているそうである。専門家であれば、何が海洋汚染をひき起こしたのか大体的見当はついているのではないか。かつて日本も公害で苦しみ、その中から企業の無過失責任を認める公害防止法を整備してきた。公害先進国である日本として、ベトナムにアドバイスできることも沢山あるのではないだろうか？ フォルモサのメインビルディングのロビーには、親会社である台湾プラスチックグループの創業者であった王永慶の次の言葉が壁に埋め込まれている。「実直に勤労し至善に達する。経営を永続し社会に貢献する」。

4. フォーとフランスパン

ベトナム料理というと先ず頭に浮かぶのがフォーだ。米を打った麺で、どこに行ってもフォーの店がある。安くてうまいからベトナムの人たちの常食になっているらしい。夜遅くなってもやっているので便利だ。我々一行は車で長距離を移動していたのでもっぱらフォーのお世話になったが、いくらうまいといっても数日間フォーばかり食べていればさすがに飽きてしまう。そこで目を付けたのがフランスパンだ。ベトナムの街を走っていると、フラン



写真7 ベトナムのフランスパン

スペインを並べている屋台が目につく。ちょうどコッペパンほどの大きさで、サンドイッチのように具を挟んで食べるらしい。我々が行ったのは屋台ではなくフエの街角にあるお店だ。フランスパンは朝食食べるということなので、目玉焼きとフランスパンをオーダーする。七輪で暖めてから出されるがトーストのように焦がすわけではない。食べてみると日本のフランスパンのように硬くはなく、表皮はパリッとしており、中もサクッとしていてとても食べやすい（写真7）。目玉焼きの方は豚肉野菜入りでかなりヘビーなので絶妙の組合せだ。これまでこんなに軽いフランスパンは食べたことがない。新しい発見だ。こうなると今度はコーヒーが飲みたくなる。フランスパンの店から歩いて2分ほどの川縁のカフェでコーヒーを飲む。ベトナムのコーヒーは、1杯ずつ金属製のドリッパーを載せて濾し出したコーヒーに甘い練乳を加えて飲むのが一般的だ。川沿いの並木の木陰の下、そよ風に吹かれながら飲むコーヒーは格別だった。フランスと激しく戦ったベトナムだが、よいところはちゃんと取り入れている、流石！

おわりに

旅は時に、これまで見逃していたものに気づかせてくれたり、新しいアイデアを生み出してくれることがある。今回のベトナム・ラオス旅行は「人と人」「人と自然」「国と国」の共生を考えさせる旅だった。

なお、今回の旅行は筆者が属する「中国の南向政策」に関する研究会の研究視察旅行であった。旅行費用を負担いただいた学習院東洋文化研究所にこの場を借りて感謝申し上げたい。

〈注〉

- 1) 古田元夫. (1995). 『ベトナムの世界史』, 東京大学出版会.

- 2) ベトナム社会主義共和国外務省編. 日中出版編集部訳. (1979). 『中国白書』中国を告発する』, 日中出版
- 3) フォルモサの海洋汚染に関する日本語の報道例としては、
2016年5月3日付日本経済新聞「ベトナムの海で魚大量死 台湾塑膠工業建設中の製鉄所近く」
2016年6月9日付日本経済新聞「魚大量死、製鉄所が元凶？」
2016年7月1日付日本経済新聞「ベトナム政府、台湾プラスチックに罰金510億円」等がある